

慢性硬膜下血種の被膜内および血腫内への好酸球浸潤について

著者	上原 哲
雑誌名	博士学位論文要旨 論文内容の要旨および論文審査結果の要旨 / 金沢大学大学院医学研究科
巻	平成2年7月
ページ	85
発行年	1990-07-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/14836

学位授与番号	医博乙第 1082 号
学位授与年月日	平成 2 年 3 月 7 日
氏名	上原 哲
学位論文題目	慢性硬膜下血腫の被膜内および血腫内への好酸球浸潤について

論文審査委員	主査	山下 純 宏
	副査	中西 功 夫
		岩 喬

内容の要旨および審査の結果の要旨

慢性硬膜下血腫における被膜内および血腫内への好酸球浸潤の成因、意義を検索する目的で、本疾患を非浸潤群と浸潤群に分けて両群を臨床的に比較検討した。さらに血腫内溶液中の免疫グロブリンと好酸球遊走活性を測定した。光顕的に131例の外側被膜内の単位容積当たりの好酸球数を計数した結果、非浸潤群（O群）は51例（38.1%）、浸潤群（I群とII群）は80例（61.1%）であった。48例の血腫内溶液の白血球像より6%以上の好酸球増加をみたものが33例（68.8%）であった。血腫内と外側被膜内の好酸球浸潤の程度は正の相関を示し血腫内のそれは、外側被膜内の好酸球浸潤の程度を反映するものと考えられた。両群は年齢、性差、受傷から手術までの経過期間には統計学的有意差を認めなかった。両群を比較すると外側被膜の厚さにおいて、浸潤群では、 $534 \pm 256 \mu\text{m}$ 、非浸潤群では、 $300 \pm 214 \mu\text{m}$ 、血腫量において、前者では $104.0 \pm 29.66\text{ml}$ 、後者では $84.6 \pm 38.06\text{ml}$ で、両者とも統計学的有意差を認めた（ $P < 0.001$ ）。血腫内赤血球数は浸潤群では、 $3.5 \pm 1.3 \times 10^6 \text{個}/\text{ml}$ 、非浸潤群では、 $2.7 \pm 1.9 \times 10^6 \text{個}/\text{ml}$ であり統計学的有意差を認めた（ $P < 0.05$ ）。CT所見では、浸潤群は等吸収型と高吸収型に多く、低吸収型は少ない傾向を示した。外側被膜の厚さは好酸球浸潤と同時に線維芽細胞と炎症細胞の増殖を伴っていた。これらの結果は、浸潤群において近い過去に発生した血腫内再出血に対する炎症反応を反映しているものと考えられた。血腫内溶液中のFDPは浸潤群で高い傾向を示した。血腫の免疫グロブリンは全例正常範囲であった。浸潤群では血腫内に好酸球遊走活性があり、その強さは血腫内溶液と外側被膜内の好酸球浸潤の程度と正の相関を示した。

以上より、慢性硬膜下血腫の外側被膜では、受傷を起点とした出血に対する慢性炎症性肉芽反応の他に、急激に内部環境を変えうる量の再出血に対して新しく炎症反応が惹起されるものと考えられる。その過程において好酸球遊走因子が産生され、それにより動員された好酸球は炎症の鎮静化に作用し、線維芽細胞を伴って組織修復に関与する可能性があるかと推察される。

本論文は、慢性硬膜下血腫における好酸球浸潤についての成因、意義について臨床的に究明したもので、脳神経外科の発展に寄与する労作と認められた。